

Title	モーリス・ド・ゲラン『ラ・バカント』（翻訳）
Sub Title	Maurice de Guérin, La bacchante (traduction)
Author	Guérin, Maurice de(Kanazawa, Tetsuo) 金澤, 哲夫
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.46 (2008. ) ,p.263(32)- 294(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森英樹教授・西尾修教授・高山晶教授退職記念論文集 = Mélanges offerts à Mori Hideki, à Nishio Osamu, et à Takayama Aki
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20080331-0263">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20080331-0263</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モーリス・ド・ゲラン 『ラ・バカント』<sup>①</sup> (翻訳)

金澤哲夫 訳

「ごらん、今では山は剥ぎ取られたように、頂上を駆け巡っていた合唱隊がいなくなった。女祭司たちも、松明も、神々しい喧騒も谷間に再び降りた。祭が四散する、神秘<sup>②</sup>は神々の懐に帰っていった。わたしはシテロン山<sup>③</sup>で育ったバカントたちのうちで一番若い。合唱隊がわたしを山頂に連れていってくれることは未だなかった、なぜならば神聖な儀式は若さゆえにわたしを退けて、盛儀を執り行うようになるためには捧げる必要がある基準の時間を満たすことをわたしに命じていたから。とうとう「季節の女神たち」<sup>④</sup>が、わたしたちを神々のために相応しくしようとしてずい分長い期間を費やすあの密かな乳母たちが、わたしをバカントたちの仲間に入れてくれた、それでわたしは今日脱け出す、わたしを包んでいた最初の神秘から。」

儀式のために必要とされる年月を重ねている間、わたしは海のほとりに住む若い漁師たちに似ていた。岩山の頂に彼らはしばらくの間現れて、今にも再び飛び込もうとする神のように両腕を水の方へ差し伸べ、体を傾ける。だが彼らの魂は死すべき胸の内では揺れ動き、彼らの傾きを引き留める。とうとう彼らは身を躍らせる、そしてそのうちの何人かは冠を戴いて波の上に帰って来たと語り伝えられている。<sup>⑤</sup> そのようにわたしは神秘の上に長

い間宙吊りになつていた。そのようにわたしは神秘に身を委ねた、そしてわたしの頭は再び現れた時、冠を戴いて、雫を滴らせていた。

バキュッスよ、永遠の若さよ、深遠でかつ遍在する神よ、わたしは我が胸のうちにあなたの刻印を早くから認め、わたしの心遣いをすべて集めてあなたの神性に献げた。ある日わたしは太陽の昇る方角へと向かったが、それはこの神の放つ光線が果実の成熟を仕上げて大地の仕事に最後の効力を付け加える時期のことだった。わたしは彼の矢に身を差し出すために丘に登り、地平線の上に最初に流れ出る彼の光にわたしの髪を広げなければならなかった。というのは、朝の炎に浸つた髪はそれによつてさらに豊かになり、ディアーヌ<sup>(7)</sup>の髪にも匹敵する美を授かると教えられているから。わたしの目は、出てゆく時に、極の下に再び降りて来る闇の末端を不意にとらえたのだつた。幾つかの天の印は、波に向かつて傾き終えるのも緩慢で、ほとんど見捨てられた空に未だ痕跡をとどめていた、そして夜の名残の静寂が田園に満ちていた。けれども、テッサリーの爽やかな谷間では、河川が普段に上げる雲に似た呼気がその上に漂つてるように、あなたの息吹の効力は、おお、バキュッスよ！闇の垂れ籠める間に大地の懐から立ち昇つたのだつた、そして太陽が戻つて来ると平野一面を隈なく覆つていた。弱い光を放つて昇る星座が夜の深みを進みつつ獲得するきらめき以上に、わたしの生は、わたしが野原の中を突き進むにつれてわたしの胸のうちに力強さも光輝も増していった。丘の一番高い頂で歩みを止めた時、わたしは神聖な土台の上に司祭たちの腕によつて持ち上げられる神々の彫像のようによるめいていた。胸は平野に広がる神の靈気を取り入れたことによつて動揺を感じ、そのために歩みはせわしくなくなり、思考も風で荒れ狂う波のようにざわめいていた。確かに、この惑乱を利用してあなたはわたしの胸の中に飛び込んだのだ、おお、バキュッスよ！なぜならば神々はこのようにして死すべき者たちの精神を不意に襲うのであつて、それは、ひしめき合い影に満ちた小枝の中にぜひとも入り込みたくて北風<sup>アキロン</sup>を使つてそれらを押し開こうとする太陽のようだ。

それからアエロー<sup>(9)</sup>が突然やって来た。このバカントは、あらゆる風の中で最も激昂した「台風」<sup>(10)</sup>と、トラースの山岳地帯をさ迷っていた母との娘であるが、この地方のナンフたち<sup>(12)</sup>によって、岩穴の奥深くすべての人間たちから離れたところで育てられたのだった。それというのも神々は、最も大きい荒地の方へと流れを向ける河川に、あるいは接近の最もむずかしい森の界限に住むナンフたちに、彼らが自然界の基本要素の娘たちとまたは死すべき人間の娘たちと交わってできた子らの養育を託すのだから。アエローはシティー<sup>(13)</sup>でリフェー<sup>(14)</sup>の山々の頂上まで登り、そこから南下して来た、そしてギリシアのあちこちに姿を現し、至る所で神秘を掻き立て、あらゆる山々の上に彼女の叫喚をもたらした。羊飼いが草原の水の方向を変えるように、神々が死すべき者たちの青春期を潤す流れを閉じる年齢に彼女は達していた。彼女は真つ盛りの生を未だに誇ってはいたけれども、輪郭は、それは認めなければならなかったが、乾涸び始めていたし、その上、神秘の常用によって彼女の美の秩序には乱れが生じ、大きな翳りの徴候を示していた。彼女の髪は、夜の髪と同じくらいに多くて、肩の上はまだ広がり、彼女が神々から授かった賜物の力強さと豊かさを証明していた。しかし、極北からの風が渦巻く中に彼女があまりに何回も髪を練り広げたということであれ、彼女が頭の中である秘密の運命の働きを耐え忍んだということであれ、この生気の失せた髪はようやく始まったばかりの歳月による傷みに先んじて衰えつつあった。彼女の視線は最も広大な平原や空の深さの影響を受けたことを最初から表明していた。その視線は常に君臨して急がずに動き、地平線に消えるすべてのものをその懐に受け止める神々しい影たちの並ぶあの空間の岸辺へとむしろ伸びていた。しかしながら、時々、この大きくて遙かに遠く流れてゆく目差は決断力を失い、鷺がその瞳に夜の最初の特徴を感じる時の困惑と同様の困惑の中で転がるのだった。彼女はまた歩の運び方にも落ち着きのなさを示していた。ある時、彼女は河や森伝いにしっかりと軽やかに歩き回っていたが、次第に動きを激しくしていった、またある時、彼女が歩みを進めていた様は、孕んだ神々を産むためにその長い冒険のさ中に避難地点を探しているラトー

ヌのようだった。時々、しつかりしようとしてためらう歩みのために、そして窮屈で重荷を負っているような頭の様子に、まるで彼女は大洋の底を歩いているかのようだった。彼女の胸が夜の説得を受けて万象の静寂に同調していた時、闇の中に発せられた彼女の声は穏やかで長く引き伸ばされ、大海原の果てのエスベリッドの歌のようだった。

アエローはわたしを彼女の友情の中に閉じ込めた、そして、神々が特別のはからいによって指名し、自ら育てることを望む死すべき者たちに対して払うあらゆる配慮を込めてわたしを教育してくれた。どのように野生の笛に指を当てたらよいのか、またどのように葦の嘆きを精神のうちに拾い集めたらよいのかを学ぶために牧神パントともに最も秘密の森へと下るアルカデーの青年たちのように、わたしは、毎日歩みをどこか人里離れた地点へと引き摺ってゆく偉大なバカントと一緒に歩いていた。まさにそのような人気のない場所で、彼女の談話は表明され、まるである河の隠れた源に居合わせたかのようにわたしは彼女の言葉が流れ出してゆくのを聞いていた

「森に君臨するナンフたちが、と彼女は語った、森の縁であまりに甘美な香や歌を好んで掻き立てるので、通りがかりの者は道のりを中断し、彼女たちの跡を追うためにあの隠れ処の最も暗い所へと誘いこまれてゆく。微妙な影響が異国人の精神に染み込んで、彼のうちに湧き上がる錯乱が歩みの確かさを損なう、そして、血管の中に常にいくらかの酔いを持ち運ぶ田園の半神たちに似た姿で彼が前進する間に、ナンフたちは彼女らの住み処が死すべき者たちの精神に及ぼす支配力を喜ぶ。

「しかしバキュッスは、呼吸するすべてのものに、そして神々の揺るぎない家族にさえも、彼の吐く息の陶酔作用を認めさせる。常に更新される彼の息吹は地上の至る所を走り、果てにおいては「大洋」の永遠の醗酏を養い、そして神々しい大気の中へと吹きつつ、闇の濃い極の回りに絶えず描き出される星辰を揺り動かす。夜

の懐の中でサテュルヌが眠るユラニユースの体の一部を切断した時、大地と大海原は流れる血とともに新しい受胎能力を受け取ったが、その最初に育った果実は地上のナンフたちと海上のアフロディットだった。バキュッス<sup>(23)</sup>は、シベールの湿った懐の中に生ぬるい蒸気のごとく絶えずとどまって、古くなった血の熱を保持するのだが、この古い血は森の奥深くにそして水に浮かぶ不滅の泡の中にナンフの合唱隊を幾つもまるごと今もなお生み出している。

「河川は大地の深い宮殿、広大で音の反響する邸をその住み処とするが、そこではあの身を屈めた神々が泉の誕生と波の出發を取り仕切っている。彼らは君臨する、耳は豊かな泡立ちに常に育まれ、目を彼らの放つ波の運命にじっと注いで。しかし彼らの円天井の深さも立ち入り難さもバキュッスからこの神々を隠しておくことはできない、なぜならばどんな接近も彼には運命によって禁じられることがなかったから。河川は河床の上で騒ぎ立ち、古代の泥土は彼らの掻き乱された水瓶の懐で揺れ動く。

「ある夏の盛りの間、わたしはパンジエー山地の頂上に住み処を据えたのだ。毎年わたしが認める密かな痛手は、大地の喜びや田園の美が近づく時、山々の斜面を行くようにとわたしを促す。神々の意に適う、または過剰な不幸のために彼らの心を動かした死すべき者たちは、天の印の間に導かれて並べられた。即ち、マイア、カシオペー、大キロン、シノジュール、そして悲嘆に暮れるイヤッドたちは諸星座の静かな歩みに加わった。運命に導かれて、それらは空の中をよじ登り、逸脱も中断もなく傾くが、確かに、登っては落下し、そして再び開始する歩みのこの続行は、定かならぬ限界にまで広がり、道から単調さを借り、幾つかの罌粟の混じる、ある幸福な状態を制定する。山々の急斜面を行く時の遅い歩みが、天体がその運行から導き出す配置に似た配置をわたしの中に産み出してくれることをわたしは望んでいた。天体が夜の階段を登ってゆくように、わたしの道はわたしを山々の絶頂へと導いていたのだ。しかし果実は近づく成熟を遠ざけることができない。毎日大地はより一層

急き立てるように恵みを与えて果実に浸透し、これらの恵みの熱は果実を焼き尽くしては、常により進んだ色となつて外に示される。そんな果実のように傷み、心の中まで冒された私には、私に示唆された生を拒絶したりその進行を遅らせたりする力がなかった。遅れがちな歩み。無口でありながらその落ち着きによって大変に力強い、そして最も激しい苦痛も和らげてくれるあの神々に献げられた隠れ処を求めての森の中での探索。西の方から吹いて来る風のそよぎの下での長い休止。太陽はすっかり沈んでいたが、夜の空ろな影も夢も、わたしの精神が耐え忍んで努力していた密かな追跡を一時きも中断することはできなかった。不死の者たちの歩みを迎え入れるあの山々の段階にまでわたしは達していた。というのも、彼らのうちの、ある者たちは連なる山々を好んで駆け巡り、波打つ稜線上を揺るぎなく歩み続け、また他の者たちは、遠くにそびえ立つ岩山の上にあつて、何時間も費やして谷間の窪みに沈み込み、そこに夜の訪れを迎え入れたり、あるいはどのようにして影や夢が死すべき者たちの精神に進入するのかわと見つめるのだから。そのような高みに到達して、わたしは夜の恵みを、神々によつて掻き立てられることすらある動揺を減じてくれる沈静と眠りとを獲得した。しかしこの休息は、風の友でありその流れの中に絶えず運ばれる鳥たちの休息に似ていた。鳥たちが影に従い森の方へと舞い下りる時、彼らの足は枝々に止まり、枝々は空に突き立って、夜を駆け巡る息吹に容易に揺れ動く。なぜならば眠りの中においても鳥たちは風の攻撃を喜び、森の梢に突然生じた極くかすかな風のそよぎにも彼らの羽毛が震えて押し開かれることを望むから。このように、まさに休息のさ中においても、わたしの精神はバキュウスの息吹に曝され続けていた。この息吹は広がりつつ、ある永遠の韻律を守り、光を享受するすべてのものに伝わってゆく。しかし少数の死すべき者たちは、運命の特権によつて、その流れについて情報を得ることができる。それはオランプ山の絶頂にまでも勢力を揮い、楯⑫に覆われたあるいは貫通不可能な鎖帷子を着了た神々の胸さえも通り抜ける。それはシベールの回りに常に揺れる青銅⑬の中に鳴り響く、そして神々の代の歴史全体をその歌の中に引き連れる「詩歌



の女神たち<sup>34</sup>」の言葉を、大地の湿った胎内に、際限のない夜の懷に、またはあんなにも多くの不死の者たちを育んだ「大洋」の中に導く。

「眠りから覚めると、わたしは「季節の女神たち」の導きにわたしの歩みを委ねていた。彼女たちはわたしの歩行を一日の諸段階に合わせて調整し、わたしは山の上で、太陽に引き摺られて、小槓の根元で回転する影のように回っていた。何人かの死すべき者たちの歩みは水の周辺で、森の奥で、または丘の下り坂で神々によって止められた。突然の根が彼らの足を地中に導いた、そして彼らの内蔵していた全生命が小枝となって伸び、葉叢となって広がった。ある者たちは澱んだ水のほとりにつなぎ止められて、聖なる静寂を守り、群がる夢を夜明け方に迎えれば、夢はその小暗い枝々の中に逃げ込む。他の者たちは、ジュピテールの森に加えられあるいは不毛の山頂に立って、すべての風を受ける古くて野生の梢を持ち、はぐれた鳥たちのうちのある一羽を常に引き止めるが、それを死すべき者たちが見守る。彼らの運命は取消し不可能である、なぜならば神なる大地が彼らを所有し、彼らは大地の懷の永遠の糧に従属しているからである。しかし彼らは、そのような姿に変えられそして身動きできない状態で、彼らの最初の状況の密かな動きを幾つか未だとどめている。季節が傾こうが再起しようが、彼らは太陽に注意を払い続ける。宇宙の中で動いているすべてのもののうち、彼らにはもはや太陽しか識別することができず、ただ太陽のみに、彼らが今もなお抱くことのできる混濁した願いを送る。あるものたちは、それが彼らの愛の力なのであるが、彼らの成長の動きを神の歩みに応じて導いたり、その通り道の方へ彼らの豊かな小枝を向けたりもする。わたしが日の光を追って入った道で、力はまだ満ちているのにわたしの歩みが減速し、最後には消え入るようになつた動かなくなってしまうのがわたしにはわかった。その時わたしは、樹皮の下に押し込められ、大地の力強い懷の中にとどめられたあの死すべき者たちに似てきた。休息の中に引き止められて、わたしは神々の過ぎ去る生を受け取っていた、動きを示すことなく、両腕を太陽の方へとねじ曲げて。それは、



日の光が最も強い輝きを放つ時刻に近かった。山の上ではすべてが停止していた、森の深い懐はもはや呼吸して  
 いなかった、豊饒な炎がシベールを燃え上がらせていた、そしてバキュッスが「大洋」の胎内に下りる鳥々の根  
 元までも酔わせていた。

「傾きかけた太陽の運行が、山の最も西寄りの地点へと向かうようわたしの歩みを決定づけていた。神が消え  
 て、彼の残す光には入り混じる影の最初の訪れが感じられたので、谷の懐と田園の全域は、ゆっくりとではある  
 が、自由な呼吸を取り戻していた。鳥たちが森の上に舞い上がり、風の流れが回復したかどうか空の中に探し求  
 めていた。だが未だ酔っている翼のために彼らはよろめいては間違いを重ねつつ、ようやくどうにか飛んでい  
 た。森の頂に生まれた眩きが空気のそよぎの目覚めを示していたが、梢はただ軽い震えを返すばかりで、糸杉の  
 小枝がパンの手の中で感じた動揺には及ばなかった。それは、好ましい夜の間に合唱隊を活気づけて、そこから  
 牧神が身を引く時で、彼の歩みには激しい拍子がまとい付き、そのために彼はよろめきつつ眠る森へと帰ってゆ  
 く。隠れ処の奥から抜け出して、野生動物たちは高台の上により生き生きとした呼吸をしに来ていたが、その眼  
 は新たな炎に包まれているように見え、その恐ろしい声は眩きと化し、そしてその大胆な歩みは疲れた足取りに  
 なってしまっていた。

「その間にも影は谷間の奥まで埋め尽くしていた。影はわたしの方の上ってきて、息づくすべてのものに眠り  
 と夢を振り撒き、ついにはわたしに達してわたしを包んだが、わたしの中に染み透ることはなかった。わたしは  
 夜の重苦しさの中にもしつかりとかつ生き生きとしていたが、他方、大地は眠りに満ち、わたしの手足に休息を  
 伝えそして手足を捉えて、全体の動きを奪っていた。わたしの額は夜を徹して見張っていたが、憔悴することも  
 なかった。額は昼の間に神々によって撒き散らされたあらゆる恵みに活気づき、それらの魅力に取り巻かれてい  
 た、そしてわたしが穫り入れてあった新たな生が燃え立つ精気をそこに送っていた。

「カリストー<sup>(35)</sup>は、ジュノン<sup>(36)</sup>の嫉妬のために野蛮な姿を与えられて、人気ない荒地を長い間さまざまに迷った。しかし、彼女を愛したジュピテル<sup>(37)</sup>が森から彼女を連れ去って星々の仲間に加え、そして彼女の運命をもちや離れることのできない休息の中へと導いた。彼女は暗闇に包まれた空の奥に住まいを授かったが、その空は諸要素、神々、そして死すべき者たちをシベールの胎内に撒き散らした。空は影のうち最も古い影たちを彼女の周りに整列させ、空がまだ所有している生の根本原理を、それに加えてその発散物が宇宙を活気づけて衰えることのない火の攻撃を、彼女に呼吸させる。永遠の陶酔に貫かれて、カリストーは極の上に身を屈めている、他方、諸星座の全秩序は移りゆき、「大洋」の方へと行路を下げる。そのようにして、夜の間に、わたしは山頂で不動の姿勢を保っていた、頭を陶酔に包まれて、バキュッスのこめかみで変わらぬ若さを維持する葡萄の枝葉と果実の冠のように頭を陶酔で締めつけられて。」

このようにアエローは彼女の運命を語ってわたしを教え導いた。神々の知識へと呼び寄せる声に従うために一旦立ち上がってからは、わたしの精神はその最初の住み処を持っていた群衆の方へと舞い戻ることはもうなかった。わたしの精神は、指導者とともに、めったに人の訪れない神秘へと遠ざかった。毎日偉大なバカントの言葉が起き上がり、わたしの前で暗い道へと進み入った。しばしば「詩歌の女神たち」は合唱隊の速い動きを離れて、ゆっくりとした歩調で夜のさ中に歩み始める。最も厚いベールに身を包み、山の端を辿り、彼女たちは暗闇の中で崇高な歌を開始する。アエローの言葉は神々へとわたしを引き連れて、闇の中に運ばれる「詩歌の女神たち」のあの声に似て進んでいった。平原の上に口を開けた洞穴、一日の最後の閃光のために残されている頂、最も肥沃な谷の河床、そのような場所を選んでアエローはわたしを導いていった。彼女の対談は長時間続いてしばしば夜のさ中にまで及んだが、そんな時彼女は独りで引き下がっていった、彼女の談話をわたしの心の中に宙吊りにしたままで、ちょうど、湿った衣服を傾いだ枝につなぎ止めて、自分たちの住まいの奥処に帰るナンフ達のように

に。

その間にも神秘は進み、とうとうわたしをその流れの中に運び去ろうとしていた、しかしバカントたちにおける神秘の最初の動きは彼女たちの起床時刻よりはるかに早くなされた。わたしたちのうちのそれぞれが、神から送られた印を自分の中に認めたので、それ以来遠ざかり始めた。なぜならば神性に侵された死すべき者たちは直ちに彼らの歩みを隠して、新しい魅力によって導かれるから。わたしたちはわたしたちの精神の流れがわたしたちを向かわせる傾向の中へそれぞれ入っていった。「天」と「大地」との娘であり、誕生するや否や、泉の湧き口に、森の様々な区域に、そしてシベールが彼女の豊饒の刻印を寄せ集めてあつたすべての場所に振り分けられたナンフたちと同じように、わたしたちはこれらの傾向によって田園のあらゆる地方へ撒き散らされた。わたしたちは諸要素を支配することに専念した神々の運命の中に迎え入れられた。河川、森、肥沃な谷に対して力を揮う神々は、彼らの眼前で進行する生を眺めては楽しむ。しかし、波の上に身を屈め、このように注意深い余暇を過ごす間に、彼らの不死の生は波の単調な落下に順応し、そして彼らの本性は凝視した諸要素の中に進入するが、それは例えば河のほとりで眠りと夢に襲われてその寛衣が波間に広がる男のようだ。どのバカントもこのように、一つの自然の運命の誕生によって標示される何らかの場所に結びつけられていた。アエローは丘の頂に現れた、そして「大地」の胸の上に頭を長い間休めた。彼女は、アマタオンの息子であるメランプ<sup>(39)</sup>のように、罌粟<sup>(40)</sup>の印のついた蛇が彼女のこめかみの回りに絡みつきにやってくるのを待っているように見えた。イポテー<sup>(41)</sup>が、泉の湧出口に座って、そこに身動きできないようにされた。彼女の広げた髪、投げ出された腕、そして走り去る水に注がれた視線が、水の運命への彼女の傾斜を、そして彼女の精神が水の流れに加わっていたことを示すだろう。プレクソール<sup>(42)</sup>の歩みは最も大きく広がった森の奥深くへ入り込んだ。大洋神の娘の一人<sup>(43)</sup>が海原を駆け巡っていて眠りに襲われる時、彼女の肢体は崩れ落ちて波の上に床をとる。彼女は旅の導きを移ろいやすい波に委ねたのだ。

漂う様は、遠くから見れば息を引き取った人間のようだ。しかし彼女を運ぶ波間に、彼女は生の軽やかさとともに横たわっている、そして彼女の胸は「大洋」によって吹き込まれた眠りを貪る。そのようにプレクソールは森の臥所で休んでいるように見えた。深い斜面の縁にとどまって、テレストーが谷間へと腕を差し伸べ身を屈めていたが、彼女は、セレーヌ<sup>(45)</sup>が、エトナ山の頂上で、噴火口の裂け目の上に身を乗り出して火山の火に松明をともす時の姿に似ていた。

わたしはと言えば、神についてまだ無知だったので、田園を無秩序に走り、手では認められなかったけれどわたしの全身を駆け巡っていると感じられる蛇を逃走のさ中に持ち運んでいた。神々の力によってある死すべき者の回りにうねるように引かれた一条の太陽光線に似た蛇のとぐろは、突き棒のようにわたしの精神を苛立たせ歩みを駆り立てる微妙な熱でわたしを締めつけていた。わたしはバキュッスを非難しつつ、そしてわたしが拘束されていると思う海の波のことを考えつつ進んで行った。しかし神は間もなくわたしの歩みを疲弊させてしまった。倒れ落ちそうに身を屈め、わたしは休息を与える大地に嘆願した、その時蛇は、とぐろを二重に巻いて、わたしの胸に長い咬み傷をつけた。痛みはわたしの裂けた脇腹の中に入ってゆかず、沈静と一種の憔悴とがあった、まるで蛇がシベールの盃に毒牙を浸してあったかのように。わたしの精神の中には、山の神々のために建てられた粗野な祭壇の上に夜の間ともされ続ける仄かな明かりと同様静かな炎が立った。幼少のバキュッスを腕に抱き締めるニザのナンフのように注意深く、また休息して、わたしは洞穴を占めていたが、アエローの叫びが神秘の到来を告げた時、わたしは立ち上がり、わたしたちの前を「夜」<sup>(49)</sup>のように歩むあのバカントの足跡を追った、折しも、影たちを呼ぶために顔をそむけ、彼女は「西方」へと趣く……

## 【訳註】

『ラ・バカント』*La Bacchante*の訳出、及び訳註を付すに当たり、ギリシア・ローマ神話への言及・表記に関して、『ル・サントール』*Le Centaure*の拙訳（『日吉紀要フランス語フランス文学』第四五号）と同じ方針に従った。即ち、訳文中の固有名詞はフランス語表記（ゲランのテキストの表記）の読みをカタカナで近似的に表し、テキストの基本的な理解にわずかなりとも資するため、一般に流布している神話に関する書物（参考文献——以下「参」と略記——D）に依拠して簡単な註を付した。その際、フランス語表記の読み（F）の後に、ギリシア語（G）またはラテン語（L）表記に基づく読みを併記した。（ラテン名についてと同様、ギリシア名についてもローマ字転写のみ記した。なお、註の説明部分においては、大概の場合ギリシア名のカタカナ表記を用いた。）

(1) バカント (*F. Bacchante; pl. Bacchantes*) ≡ バッケー (*G. Bakche*)、バツカイ (*pl. Bakchai*) ≡ バッカ (*L. Baccha*)、バツカエ (イ) (*pl. Bacchae*)。ゲランのテキストの題名では単数で、バカントたち (バツカイ) のうちの一人を扱う。バツカイとはディオニュース (バツカス) に仕える供の女性たちで、酒神の諸国遍歴につき従い、バツカス祭と名づけられたバツカスの秘儀を祝った。酒神の影響を受けて忘我の境に陥り、判断力を欠く凶暴な行為に及び、乱舞して、狂ったように山野を動き回った。（註6参照）エウリーピデースに彼女らを劇化した『バツカイ』（『バツカスの信女』がある（参D-18））。

(2) 原文の ≪*mystères*≫ はバツコス信仰における「秘儀」としても理解・翻訳できるのだが、ゲランの言葉遣いの控え目な風姿、テキスト全体の抽象化への傾斜を考慮して、具体的なイメージに向かうよりもむしろ曖昧の襞を残すべく訳語を「神秘」に統一した。

(3) シテロン山 (*F. le mont Cithéron*) ≡ キタイローン (*G. Kithairon*)。アッティカとポイオーティアの間、テロバイの南に連なる山脈。エウリーピデース作『バツカイ』では、酒神の影響を受けた女たちがキタイローン山

中で踊り狂う(参D-18)。

- (4) 「季節の女神たち」。原文では *les Heures* で、これはギリシア神話の「ホーライ」(*G. Horai*) = 「ホーラー」(*G. Hora*) たちに該当する。ギリシア語「ホーラー」は時間の周期を意味し、一日の時間、季節、年についても用いられ、「ホーライ」は天の門を守り自然の秩序と季節を司る神格とされた。ゼウスとテミスの娘たちで、人数については変動があるが、ヘシオドスによれば規律、正義、平和を体現する三人であり(参D-13)、やがて春・夏・冬と同一視され、さらに後の時代には十二人とされた(ギリシア人は一日を十二時間に分けて、彼女たちを「十二姉妹」と呼んだ)。——ゲランのテキストの文脈に沿って、フランス語の意味を素直に伝えるために「時間の女神たち」と訳すことも可能だろうが、通例にならって「季節の女神たち」としておいた。後段「眠りから覚めると……」においては彼女たちは一日の時間の経過に関与している。

- (5) ゲランは韻文詩『グロキユス』*Glaucus* において、海に飛び込み再び陸に上がった時は神になっていた漁師を扱った。この伝説はオウイディウス『変身物語』巻十三の「グラウコス」の段で語られている(参D-1、D-15)。

- (6) バキュッス (*F. Bacchus*) = バックス (*G. Bakchos*) = バックス (*L. Bacchus*)。葡萄、葡萄酒、遊蕩や放縦に結びつけられたローマの神格。ギリシアのディオニュソス (*G. Dionysos*) に同一視された。ディオニュソスはゼウスとセメレーの子であるが、セメレーはゼウスの妻ヘーラーの企みのために妊娠六ヶ月で死んでしまう。ゼウスは彼女の胎内から胎児を取り出して、自分の太腿の中に縫い込む。月満ちて生まれたディオニュソスをゼウスはヘーラーの目の届かないようにと人に預ける。子山羊に変えられたディオニュソスはニューサのニンフたち(ヒュアデス)によって育てられ、更に別の手に託される。成長して、エジプト、シリア等の諸国を遍歴し、葡萄の栽培法や葡萄酒の作り方を広め、プリュギアでキュベレーから秘儀の教えを受けた。ト

ラーキアでは彼への信仰に反対してバツカイを拘束した王を狂気に陥れ、排除させた。地中海沿岸のすべての国々に彼への信仰を確立した後、インドにも赴き、ポイオーティアに戻り、テーバイでは家庭を放棄した女たちをキタイローン山中で乱舞させ、彼に対立した王を斥けた。その後も彼に抗する者たちをことごとく狂わせ、打ち負かした。彼への信仰はギリシア全域に広まり、やがて神としてオリュムポス山に迎えられることになる。植物の、そして自然の豊かな生命力の象徴である酒神ディオニユーススは芸術の守護神でもあり、他に多様な属性を誇った。秘儀を伝授された者たちが彼を讃えて祭儀の折に歌い踊り饗宴に打ち興じたが、そのようにバツカイに取り巻かれる陽気な生の神としての性格を色濃く持つようになったのは、特にローマ帝国においてバツクスの名のものであったとされる。

(7) デイアーヌ (*F. Diane*) ≡ デイ (ー) アーナ (*L. Diana*)。ローマの狩・森の女神で、古い時代からギリシアのアルテミス (*G. Artemis*) と同一視されてきた。

(8) テッサリー (*F. Thessalie*) ≡ テッサリア (*G. Thessalia*)。ギリシア北部の一地方で、オリュムポス山の南に位置する。

(9) アエロー (*F. Aello*) ≡ アエロー (*G. Aello*)。ヘシオドスによれば、タウマース (ポントス「海」の息子) とエーレクトラー (オーケアノスの娘) との娘たちハルピュイアイ (*G. Harpyiai*) の一人で、「突風、疾風」を意味する。彼女の二人の姉妹は「オーキュベター (速く飛ぶ女)」、「ケライノー (暗い女)」と名づけられ、三人とも美しい髪と翼を持った女と考えられていたが、次第に恐ろしい姿をした怪物、子供や魂を奪い去る怪鳥と見なされるようになった。——ゲランは名と風の属性をハルピュイアイの一人から借りて一人のバカントに与え、彼女を神格 (テューポーン) と人間 (ディオニユーススの供の女) との子とした。

(10) テイフォン (*F. Typhon*) ≡ テューポーン (*G. Typhon*)。タルタロスとガイア (大地) から生まれた巨大な怪



物、台風など自然の猛威の神格化。

- (11) トラーヌ (*F. la Thrace*) = トラーキア (*G. Thrakia*)。バルカン半島南東部の地域。ディオニューソスは本来この地方出身の神とされている。
- (12) ナンフ (*F. nymphe*) = ニュムペー (*G. Nymphe*)。自然の様々な場所に棲む精・女神。(拙訳『ル・サントール』訳注(6) 参照——『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』第四五号、平成十九年九月、所収——以下同様)
- (13) シティー (*F. la Scythie*) = スキュティア (*G. Skythia*)。紀元前六世紀に黒海北岸に遊牧民族スキタイの建てた国。(拙訳『ル・サントール』訳注(11) 参照)
- (14) リフェーの山々 (*F. les monts Riphées*) = リーパイア山 (*G. Ripaia*)。ギリシア人たちが北部地域にあると考えた神話的な山々で、時としてヒュベルボレ(イ)オス人たちの国(極北の地)の山脈と混同された。——ゲランのテクストではスキュティアにある山々と考えられている。ウエルギリウス作『農耕詩』にはスキュティアとリパエイ (*L. Riphaei*) の二つの名前が一詩行の中に並んで出てくる(第一歌、二四〇——参D-3、D-17)。
- (15) ラトーン (*F. Latone*) = レトー (*F. Létô*) = ラトナー (*L. Latona*) = レートー (*G. Leto*)。レートーはティーターン神族を両親に持ち、ゼウスに愛されたが、この最高神の妻ヘーラーが嫉妬して、レートーが子供を産む場所を提供しないよう全世界に命じたため、彼女は休む場所もなく数ヶ月もさ迷った。ようやく浮島のデロス島に辿り着いた彼女は、九日九夜陣痛に苦しんだ末に、双子の兄妹アポロンとアルテミスを産んだ(オウィディウス『変身物語』卷十——参D-1、D-15)。
- (16) エスペリッド (*F. les Hesperides*) = ヘスペリデス (*G. Hesperides*) —— ヘスペリス (*G. Hesperis* の複数)。大地

の西の果ての園に住む「黄昏の娘たち」(一般に三人、説により四人とも七人ともされる)。ゼウスとの結婚時にヘーラーにガイアから贈られた黄金の林檎のなる木を竜とともに守りながら、甘美な調べを歌った美しい娘たちで、後の代まで美しい幻想の産物として詩人たちの靈感の源となった。

(17) 牧神パン (F. le dieu Pan) = パーン (G. Pan)。アルカディアの牧畜・牧者の神。シューリンクス笛(葦笛)の奏者として知られた(拙訳『ル・サントール』訳注(5)参照)

(18) アルカデーの青年たち (les jeunes Arcadiens)。アルカデー (F. Arcadie) = アルカディア (G. Arkadia) はペロポネソス半島の中央に位置する、古代ギリシアの一地方名。牧神パーンの国であり、牧歌においては幸福の国として描かれた。

(19) オセアン (F. Ocean) = オーケアノス (G. Okeanos)。天空ウーラノスと大地ガイアの子、水の神格化。世界を取り巻く大河でもあり、大洋でもあるが、ここでは「大洋」と訳した。すべての河川と三千人のオーケアニデスの父。(拙訳『ル・サントール』訳注(12)参照)

(20) サテュルヌ (F. Saturne) = サートゥルヌス (L. Saturnus)。ローマの古い農耕(播種・穀物)の神だが、早い時代にギリシアのクロノス (G. Kronos; F. Cronos) と同一視された。クロノスは天空ウーラノスと大地ガイアの末子。クロノスは、夫によって子供の百手巨人や一眼巨人を冥府送りにされたガイアが怒って彼に与えた鎌を用いて、父の生殖器を切り海に投げ込んだ。その時吹き出た血が大地に染み、とねりこの精メリアス (G. Melias) —— 複数、メリアデス (Meliades) などが生まれ、また海に落ちた陰部・血潮に群がる泡からアプロディーテーが生まれたとされる。

(21) ユラニウス (F. Uranus) = ウーラノス (G. Ouranos; Uranos; F. Ouranos)。大地ガイアの子であり夫でもある、「天」の神。二人の結婚からティーターン神族(六男神と六女神)が、そして百手巨人ヘカトンケイルが三

人と、一眼巨人キュクロープスが三人生まれた。彼はこの後二者があまりに醜悪なので冥界のタルタロスに閉じ込める。ガイアの怒りを買ひ、クロノスにより去勢されその座を奪われるまでは、生殖能力の高い、全世界を支配する神であった。

(22) アフロディット (*F. Aphrodite*) ≡ アプロディーテー (*G. Aphrodite*)。ギリシアの美・愛・豊饒の女神。(註

(20) 参照)

(23) シベール (*F. Cybele*) ≡ キュベレー (*G. Kybele*)。本来はギリシア神界に属さず、小アジア北部プリュギアで崇拜されていた大地女神。ギリシア・ローマに導入されて神々の母レアー (*G. Rhea*) (ウーラノスとガイアの娘) と同一視された。万物生成の原理であり、豊穡多産の女神として、植物・動物・人間・神々の繁殖に力を揮った。成長して葡萄の木を発見したディオニューソスが諸国をさ迷った時、プリュギアのキュベレーの許に赴き、秘儀を学んだ。この二人の神に対する崇拜は似たような様相を呈し(踊り狂う従者たち)、共通の祝祭的な側面を持った。(拙訳『ル・サントール』訳注(3) 参照)

(24) パンジュー山地 (*F. les monts Pangées*)。普通は単数で、パンジュー山 (*F. le mont Pangée*) ≡ パンガイオス (*G. Pangaios*) またはパンガイオン (*G. Pang (g) aion*) ≡ パンガエア (*L. Pangaea* ≡ *Pangaeus mons*)。トラキアとマケドニアに跨る山脈。トラキア王のリュクルゴスはディオニューソスとその信徒たちを迫害したため、この酒神に気を狂わせられ、葡萄の木に見えた息子を斧で打ち殺し、正気に戻ったが、パンガイオス(パンガイオン) 山中に連れて行かれ、四頭の馬に縛りつけられて八つ裂きにされた。——また、ウエルギリウス『農耕詩』第四歌に、オルベウスの妻が水蛇に咬まれて死んだ時、《*les hauteurs du Pangée*》が、他の山々とともに、森のニンフたち(ドリュアデス)の群れの叫び声に満ちて泣くのが聞こえたとする。(参D-3、D-

17)

- (25) マイア (*F. Maia*) = マイア (*G. Maia*)。アトラースとプレイイオネー (オーケアノスの娘) との間の娘で、他の姉妹六人とともにブレイアデス (七つ星) を形成する。彼女はゼウスに愛されて、アルカディアの山中の洞窟でヘルメースを産み落した。彼女は、ゼウスとカリストーとの息子アルカスの乳母となり、これによってもヘーラーの怨みを買った。迫害されて休むことのできない彼女を憐れんでゼウスが星にしたとされる。——プレイヤッド星団については、拙訳『ル・サントール』訳注 (19) 参照。
- (26) カシオペー (*F. Cassiopée*) = カッシオペイア (*G. Kassiopeia*)。一般的にエチオピア王ケーペウスの妻とされている。カッシオペイアは自分が (そして娘のアンドロメダーも) ネーレイイデスより美しいと誇ったため、怒った彼女らの訴えを受けたポセイドーンが海の怪物を彼女の国に送った。国は荒らされて、神の怒りを鎮めるためにアンドロメダーが生け贄として海辺の岩に縛りつけられた。怪物を殺し、彼女を解放したのはベルセウスであった。娘を救出してくれたら彼に与えてもよいと約束しておきながら、父母は結婚を妨げようとする。死後ポセイドーンによって星座にされたカッシオペイアが一年のある時期に夜空で滑稽な姿勢を取るの、この裏切り行爲を罰するためであるとされる。
- (27) 大キロン (*F. le grand Chiron*) = ケイローン (*G. Cheiron*)。クロノスとピュリラー (オーケアノスの娘) の子で、ケンタウロス族の一人。ヘーラクレースの毒矢に当たって苦しみ、死ぬ権利をプロメーテウスから譲ってもらってようやく死ぬことのできたケイローンは、非の打ちどころのないケンタウロスとしてゼウスによって夜空に上げられ、射手座 (一説にはケンタウルス座) となった。(拙訳『ル・サントール』訳注 (10) 参照)
- (28) シンジュール (*F. Gynosure*) = キュノスーラ (*G. Kynosura; Gynosoura*)。クレータ島イデー山のニンフ。もう一人のニンフのヘリケーとともに乳母としてゼウスを養育したため、クロノスに迫害された。ゼウスはキュノスーラを小熊座に、ヘリケーを大熊座に変えた。

(29) イヤッドたち (*F. les Hyades*) = ヒュアデス (*G. Hyades*)。ゼウスの子ディオニューソスを養育した七人のニンフ。これに報いるため、あるいは兄弟ヒュアースの死を嘆いて自殺したのを憐れんで、ゼウスが天に置いたとされる。牡牛座の頭部を形成する七つ星のヒアデス星団。註(6)、(48) 参照。(拙訳『ル・サントール』訳注(18) 参照)

(30) 罌粟 (*pavots*)。オウイデイウス『変身物語』第十一章において、「眠り」の棲み処である洞窟の入口には罌粟や無数の植物の花々が咲き、それらの抽出液によって「夜」が夢うつつの麻痺状態を暗い大地に振り撒くと語られる(参D-1、D-15)。——「罌粟」の催眠(陶酔へと誘う)作用が、夜空の天体の動きが作り出す「あの幸福な状態」に関与するということだろうか。

(31) オランプ山 (*F. le mont Olympe*) = オリュムポス山 (*G. Olympus*)。テッサリアとマケドニアの境に聳えるギリシアの最高峰。(拙訳『ル・サントール』訳注(7) 参照)

(32) 楯 (*F. égide* エジッド、*G. Aegis* アイギス)。ゼウスとアテーナー(アテーネー)の山羊皮製の武具(鎧あるいは楯)(防御ばかりでなく攻撃にも使われた)。ゼウスの楯はヘーパイストスの造ったもので、雷によっても破壊できず、嵐を起こし、人々を恐怖に陥れた。アテーナーの楯には真ん中にゴルゴーン的首が飾られ、見る者を石と化した。またホメロス作『イーリアス』ではアポローンも用いた。時に「雲楯」(参D-9)と、時に「神楯」(参D-13)と訳される。

(33) 「青銅」(*airain*)とはキュベレーが彫刻などに表される時しばしば手に持つタンパリンの類の楽器のことか。あるいはむしろ、キュベレーにつき従った祭司たちコリュバンテス(*G. Korybantes*) = コリバント(*F. Corybantes*)が踊りながら打ち合わせた楯や剣、または鳴らした笛・太鼓・シンバルなどのうち青銅製のものを考えればよいのだろうか。——キュベレー信仰は、ディオニューソス信仰と共通の要素として、熱狂的に騒

ぎ踊る祭司(ディオニューロスにおけるバックカイに相当)を持つ。註(23)参照。

- (34) 「詩歌の女神たち」＝ミューズ (*F. les Muses*) = ムーサイ (*G. Musai*) (単数: ムーサ *Musa*)。一般に、ゼウスとムネーモシユネー(記憶の女神)との間の九人の娘たちで、詩の様々な形、即ち詩歌、演劇、音楽、舞踊など人間の色々な芸術的・知的活動を司るとされるが、ここでは「詩歌の女神たち」と訳しておいた。

- (35) カリストー (*F. Callisto*) = カリストー (*G. Kallisto*)。アルカディアの森のニンフ。処女を守る誓いを立てて女神アルテミスにつき従い、狩に明け暮れていたところゼウスに見初められた。彼女は拒みきれず、ゼウスの子を孕み、仲間のニンフたちから疎まれ、ゼウスの妻ヘーラーの嫉妬を買った。彼女が男児アルカスを分娩した時、ヘーラーは彼女を責め立てて牝熊に変えた。(あるいは、妻の復讐から守るためにゼウスが彼女を熊に変えたとも、彼女の妊娠を沐浴の時に知って怒ったアルテミスの仕業だとも言われる。) 醜い姿になった彼女は山野を寂しくさ迷い続けた。成長した息子アルカスが山奥で狩をしていて黒い牝熊に出くわした。母だとは知らずに槍を投げようとしたところ、恐ろしい罪のなされるのをゼウスが防ごうとして(あるいは、熊を追ってゼウスの神殿に入ろうとしたが、そこは侵入すれば死をもって罰せられる聖域だったのでゼウスが二人を憐れんで、二人を天上に連れ去り星座にした(母を大熊座に、子を小熊座またはアルクトウーロス星——牛飼座の首星「熊の番人」——に)と言われる。——他に、ヘーラーがアルテミスを説得して弓矢で彼女を殺させたという伝、アルテミスが誓いを破った彼女を罰するために殺したという伝もある。

- (36) ジュノン (*F. Junon*) = ユーノー (*L. Juno*)。ローマ神界最大の女神。ギリシアのヘーラー (*G. Hera*) (ゼウスの正妻で最大の女神) と同一視された。前註参照。

- (37) ジュピテル (*F. Jupiter*) = ユーピテル (*L. Jup(ter)*)。ローマの主神。後にギリシアの最高神ゼウス (*G. Zeus*) と同一視された。(拙訳『ル・サントール』訳注(15)参照)

- (38) アミタオン(ゲランのテクスト中の綴り *F. Amithaon* —— 一般的にはむしろ *Amythaon*) ≡ アミュターオーン(*G. Amythaon*)。クレレーテウス(ミーノースとパーシバエーの子)とテューローの子。メラムプースの父。
- (39) メランブ(*F. Melampe*) ≡ メラムプース(*G. Melampus, Melampous*)。殺された蛇を手厚く火葬にし、育てた蛇の子に寝ている間に首に絡みつかれ耳を掃除されてから動物の言葉を理解できるようになり、以後様々な術に通じ、数々の善行をなし、奇蹟も起こした。(拙訳『ル・サントール』訳注(2) 参照)
- (40) 罌粟はヒュプノス(*G. Hypnos*)。「夜」の子であり、「死」の双子の兄弟である「眠り」の擬人神)の属性とされる。註(30) 参照。
- (41) イポテー(*F. Hippothée*)。これに近い、ギリシア神話に登場する名前にヒップトエー(*G. Hippothoe*)があり、複数の女性に与えられているが、彼女たちはいずれも何らかの形で水に関連する。先ず、海神ネーレウスの娘たち(ネーレーイデス・海の無数の波の擬人化とされ、海の底で父の宮殿に住み、黄金の玉座に坐り、織物をしたり歌ったりして時を過ごす、その数は一般に五十人と言われる、美しい娘たち)の一人。また、メストール(ペルセウスとアンドロメダーの息子)とリュウシディケー(ペプロスの娘)との娘で、彼女はポセイドーンにさらわれてエキーナデス群島に連れ去られ、そこで海神と交わりタピオスを生んだ。更に、ポセイドーンとテューロー(彼女はエニーペウス河に恋心を訴えたが、この河神に化けたポセイドーンと交わった)との息子ペリアース(彼はネーレウスと双子の兄弟)の娘の一人。——ゲランのテクスト中の「イポテー」は以下に続く「プレクソール」(註(42))、「テレストー」(註(44))とともに、ギリシア神話から借用した名前をバックカイ(バカントたち)に与えたということだろう(参B-4, B-10)。——ヘシオドス『神統記』には三つの名がゲランのテクスト中と同じ順序で記されている、「ヒップトエ」はネレウス(海の息子)とドリス(大洋の娘)との娘として、「プレクサウラ」(*G. Plexaura*)と「テレスト」(*G. Telasto*)は大洋とテテュスの娘たちとして



(この部分の表記は参D-13による)。

- (42) プレクソール (*F. Plexaure*) ≡ プレルクサウレー (*G. Plexaure*)。十九世紀ラルース (参D-8) はヘシオドスを引用して、*Plexaure* の名をオーケーアニデス (次註参照) のリストの中に挙げているが (≪OCEANIDE≫の項)、一方アポロドーロスはネーレーイデスの一人として数えている (参D-12)。前註参照。
- (43) 大洋神の娘の一人 ≡ オセアニッド (*F. une océanide*) ≡ オーケーアニス (*G. Okeanis*)。複数はオーケーアニデス (*G. Okeanides*)。大洋神オーケーアノスと、妹であり妻であるテーテュースとの間の娘。オーケーアニデスは海のニンフたちで、その数三千人とされる。
- (44) テレストー (*F. Telestos; G. Telestō*)。十九世紀ラルース (参D-8) のオーケーアニデスのリストの中に *Telestos* の名が見出される。註 (41) 参照。
- (45) セレース (*F. Ceres*) ≡ ケレース (*L. Ceres*)。ローマの古い神格で、穀物・豊穰の女神。大地から生じる精気 (樹液) に関連するとされ、若い芽をふくらませ、麦を実らせる地下神としての役割を持つ。ギリシアのデーメーテル (*G. Demeter*) がローマに移入されて以来、このギリシアの女神と同一視されるようになった。ゼウスとデーメーテルの娘ベルセポネーは野の花を摘んでいたところ、彼女に恋した冥界の王ハーデース (プルートーン) によって突然に地下へとさらわれた。デーメーテルは娘を探して、松明をかざし、九昼夜飲まず食わずで世界をさ迷う。オウイディウスは『変身物語』巻五の中で次のように語る。「母 (ケレース) は驚愕して、地上に至る所に、すべての海の淵の中に、空しく娘を捜し求めた。(……) 両手で、エトナ山の火に松明を点し、それを持って氷りつくような闇の中を休みなく進んだ。」(参D-1、D-15)
- (46) エトナ山 (*F. I'Etna*) シチリア島の火山。名は、ウーラノスとガイアの娘アイトネー (*G. Aitne*) またはアイトナー (*G. Aitna; L. Aetna*) に由来するとされる。

(47) 蛇はバカントの象徴的属性とされる(参B-4、八九-九〇頁)。エウリピデス作『バッコスの信女』の中で合唱隊は次のように歌う。「父君〔ゼウス〕は花輪にかえて、蛇を彼〔バッコス〕が頭にめぐらしぬ。信女らのいままなお、蛇を挿しに結びならわしはこれよりぞ。」(松平千秋訳、参D-18、四五-五頁)

(48) ニザ (F. Nysa) = ニューサ (G. Nyssa)。所在不明の神話的な山。この山でディオニューソスはニンフたち(ヒュアデス)によって育てられたが、彼女たちのうちの一人もまたこの名を持つ(参D-4)。

(49) 「夜」(F. la Nuit) = ニュクス (G. Nyx)。ここでは頭文字が大文字であることからして、一般的な時間区分の「夜」であるとともに、擬人化された夜の女神と考えるのが適当だろう。ニュクスは非常に古い起源を持ち、根源的な暗さを表す。彼女はカオス(混沌)の娘であり、アイテール(上天の輝く空気)やヘーメラ(昼)ばかりでなく、死や運命や老いや悪霊や眠りや夢や憤りや争いなど人間にとって好ましがらざる神格を生んだ。ヘスペリデス(黄昏の娘たち)(註(16))の母でもある彼女は、世界の西の果ての「黄昏の国」、誰も敢えて危険を冒して足を踏み入れることのない地方に住むとされる。(参D-6)

#### 【訳者解題】

モーリス・ド・ゲラン Maurice de Guérin (一八一〇-一八三九) の作品として『ル・サントール』 *Le Centaure* と『グロキユス』 *Glaucus* がバルベール・ドールヴィイ Barbey d'Aurevilly 宛の手紙の抜粋とともに、ジョルジュ・サンド George Sand の紹介文を冠せられて、一八四〇年五月『両世界評論誌』*Revue des Deux Mondes* に掲載された。そこには『ラ・バカント』 *La Bacchante* はなかった。この散文詩が日の目を見るのは、トレビュシヤン Trebutien 編集による詩人の著作集の第二版 *Journal, lettres et poèmes* (一八六二年刊)(参A-1)においてであった。(第一版は *Reliquiae* の題の下に一八六一年出版)

『ラ・バカント』は一八三六年にゲランが未完のままに放り出した断片で、その自筆原稿を友人のオギュスト・シヨパン Auguste Chopin が書き写し、一八四三年にサント＝ブーヴ Sainte-Beuve に写しを送っている(参A-3、二九五頁)。だが、トレビュシヤン版の著作集(一八六一年刊の初版)の巻頭に寄せた小論の中でこの批評家は、ゲランは『ル・サントール』ばかりでなく『バカント』という作品も書いたが、これは発見されなかったと述べている(参A-1、XXXV頁)。これは彼がコピーの存在を知らなかったから(参C-10、第一卷、一〇四頁、注2)と考えてよいものだろうか、紛失したのだろうか、むしろその存在を無視したと推測しては間違いだらうか。ともあれ、ゲランの別の友人アメデ・ルネ Anecdée Renée が長い沈黙のうちに所有していたコピーが一八六〇年一二月に送付され、著作集の第二版においてようやく読者の眼前に出現し、以後ほとんど常に『ル・サントール』と組み合わせるようになって出版されることとなる。

トレビュシヤンによると、一八三五年か一八三六年の秋にゲランと一緒に「Musée des Antiques」(ルーヴル美術館の古代美術品陳列室)を二、三回訪れたが、その時ゲランは『ル・サントール』の着想を得て、その後の五旬祭 Pentecôte には彼の当時の住所にやって来てこの詩を読んだということである(参A-3、第一卷、二八八頁)。またゲランの著作集第二版の序においてトレビュシヤンは、ここに新たに加えられた『ラ・バカント』の着想は、『ル・サントール』同様、同時期の美術館見学に由来すると言っている(参A-1、V頁)。この証言は、彼に宛てられたバルベール・ドールヴィイの手紙(一八五四年一月二日付、参C-10、第四卷、一〇六頁)によっても確認される。つまりバルベールは、ゲランが彼に繰り返し語ったこととして次のような内容を伝えている。ゲランの造形芸術に対する嗜好や知識はトレビュシヤンのお蔭であり、バルベールがカーンに行っている間に彼と一緒に美術館を訪れた時のことを決して忘れないだろう、トレビュシヤンは彼の中に眠っていた芸術に対する本能を目覚めさせてくれた。この手紙の中の、バルベールがカーンを訪れた時というのは一八三五年の秋のことであるから、『ル・サントール』は一八三

五年の秋に着想され、一八三六年五月には完成していた、『ラ・バカント』はそれに引き続いて執筆された、と推定されている(参B-4、XIII頁)。

一八三五年当時、ルーヴル美術館の古代美術品ギャラリーにはサントールを表現する数々の作品が陳列されていたが、バカントを表す作品は更に多かつた(参B-4、XXVII-XXVIII頁)。『ラ・バカント』着想の源には、しかし美術からの視覚的な影響ばかりでなく、様々な読書を経てのゲランの内的進展を見るべきで、この散文詩も『ル・サントール』同様、個人的な靈感に基づくものであるとされる(参B-4、XVI頁)。更に、彼の読んだポザニアス Pausanias の *Travels in Greece* (日本語への抄訳——参D-14) はルーヴルで見た作品の解説の役割を果たし、ギリシア人の生活や自然、また神話的風土へと彼の心を招いた(参B-4、XXIII-XXIV頁)。

またその頃ゲランは教授資格試験の準備に取りかかるべく、プログラムに挙がっていたギリシア・ラテンの作品の中から、オウイディウス作『変身物語』、ウエルギリウスの特に『農耕詩』、ヘシオドスの『神統記』などの他、特に彼の『ラ・バカント』のためにエウリピデス『バックスの信女』に親しんだとされるが、これはまた彼がコレージュ・スタニスラス以来長い間培ってきた古典教養を更に豊かにするものであった(参B-4、XXXII頁)。こうしてギリシア・ラテンの古典に対する知識と理解が、神話的・宗教的世界の反映が、審美的・秘儀的イメージが、『ル・サントール』以上に『ラ・バカント』の詩空間を豊かに織り成している。ただ、この詩は未完成であるとされ、豊かに見える反面、時にイメージの連なりが滑らかでなく、時に統一を欠くように思われる。詩のリズムについても、ベルナル・ダルクールによれば、『ル・サントール』は完璧な自在の域に達して詩人の見事な技量を示しているが、それに反して、『ラ・バカント』にはある種のぎこちなさが見られ、その息遣いも時々短くて楽ではない。ある種の効果を意識的にねらい過ぎるあまり、自然なリズムの流れを損なっている(参B-5、三六七-三六八頁)。

『ラ・バカント』は一言で言えば *imitation* (通過儀礼・秘儀伝授) の物語で、ある若いバカントがアエローという

先輩のバカントに導かれてバックス信仰の秘儀に参入するというものである。このアエローにはモデルがあったという指摘がなされた。バルベール・ドールヴィイが一八三五年にゲランのために書いた散文詩『アマイデ』*Amidée*の女主人公アマイデはやつれ傷つき過去の人生や心の秘密をかかえ込んだもう若くない女性で、詩人 *Somegod* (ゲランをモデルとする) や哲学者 *Altai* (バルベール自身) があるいは自然へと目を開かせようとしていたり、あるいは道徳的生活へと回心させようとするが、かいたく元の悪習へと戻って行く(参C-8、第二卷。参C-9)。アマイデのモデルとなった女性はバルベール自身がトレビュシヤン宛の手紙(一八五四年二月五日付、参C-10、第四卷、一三〇頁)の中で明らかにしているところによれば、彼が『備忘録』*Memoranda* (これもまた最初の二卷はゲランのために執筆された)(参C-8、第二卷)の中で *Cecilia Metella* と呼んだ娼婦のことであり、これが『ラ・バカント』のアエローのモデルでもあるとベルナル・タルクールは考えた(参A-3、二九六頁。参B-5、一六二―一七〇頁。更に参C-9、一二―一三頁)。バルベールの女主人公は精神の高みへと向かうことなく現実生活の低地へと舞い戻り、ゲランの描くアエローは古代の神話的雰囲気の中を神秘の高みへと登りつつ若いバカントを招き導こうとする。アマイデの描写はむしろ散文的な具体的記述によっているが、アエローは具体的な特徴の描写に乏しくむしろ抽象性・象徴性の高い肖像となっている。バルベールとゲランは同一のモデルから出発しながらも、それぞれの作品でそれぞれの特質、資質の違いを如実に示している。散文詩という同じ呼称を与えられながらも、『アマイデ』はむしろ散文に近く、『ラ・バカント』は詩の天界の靈氣に包まれている。

『ル・サントール』においては、老いたマカレーが、彼の師キロンの教えを伝えつつ、若いメランプに自らの生を語っていた。『ラ・バカント』においては、大バカントであるアエローが自分の運命を語ることによって、若いバカントをバックス信仰の秘儀へと導こうとする。両作品ともに、古い世代から新しい世代に伝えられる言葉が、そしてそれを受け継ぐ者の言葉が詩の本体をなす。語り手が複数となっても、全体は、決して単純ではないがしかし大きな

一つの声に流れ込んでゆくように思われる。それ故、『ル・サントール』の翻訳においてキロンの言葉とマカレーの言葉を明確に訳し分けなかったように、『ラ・バカント』においてもアエローの言説と若いバカントの言葉遣いに違いや変化をつけることをしなかった。ゲランのテクストそのものが、そのようには書かれていない。また、テクスト中の語り手「わたし」は当然女性であるが、時に文法的なしるしがそれを告げてはいても、語りそのものに(男性との)性差を感じさせるものがあるようにほほとんど思われなため、特に女性的な言葉遣いを用いて訳すことをしなかった。そして、一人称で語られても、特に話し言葉の口調で訳さなかった。この散文詩はあくまでも書かれた文章からなるテクストとして考えられる。『ラ・バカント』の翻訳に当たっても、『ル・サントール』についてと同様、ゲランのテクスト全体の言葉の流れを可能な限り尊重するように努めた。

この詩はどのような評価を受けただろうか。バルベール・ドールヴィイは『ラ・バカント』を『ル・サントール』よりも美しいと考えていた(トレビュシヤン宛一八四三年三月二五日の手紙、参C-10、一〇二一—一〇三頁)。トレビュシヤンは、彼の編集した著作集第二版に新たに『ラ・バカント』を加えることができたのは幸運の極みであるとしながらも、これを『ル・サントール』と同じ種類の作品の奇妙な断片ととらえている(参A-1、<頁)。同著作集の第一版に序文を寄せたサントールは、ゲランが書いた『バカント』という散文詩の断片は見つからなかったと言っている(参A-1、XXX頁)、これはむしろドカオールも述べているように(参B-4、LXXXIII頁)、発見されたとしてもゲランの名誉になるような作品ではないと考えていたのだろうか。レミッド・グールモンは『ル・サントール』に最大級の讃辞を捧げる一方で、『ラ・バカント』は同じ調子、同じ素材からなる作品であると控え目に記すにとどめている(参A-2、九頁)。これに対して、フランソワ・モーリヤックは両作品ともに我が国の文学の中で最も美しい散文詩であると言った(参A-4、一一頁)。アルベール・ベガンはゲランの作品はフランス文学において独自の位置を占めると述べている、即ち、ユゴーの壮大なヴィジョン以前に、ロマン主義の中で宇宙的な

陶酔の声が聞かれるのは唯一彼の作品においてである、としている(参C-4、三五二―三五三頁)。この声の中に、古代人にとっては魂の病であった不可能への愛を、「大海原の果ての黄昏の国の娘たちの歌」を聴き取ったのはシャルル・デュ・ボスであった(参B-8、一〇一頁)。同様にゲランの宇宙的なヴィジョンについて語ったピエール・モローは、『ル・サントール』と『ラ・バカント』を、最も純粋な観念論が最も純粋な大理石または雪花石膏を纏っている二つの傑作と称した(参B-7、六五頁、七〇頁)。そして、ガシウトン・バシュラールは『ラ・バカント』のカリストーの神話の中に、諸星座が教える想像力のダイナミズムを、諸星座の動きが告げる緩慢な歩みの絶対性を読み取り、夜空を巡る夢想のイメージの美しさを指摘し、天空の音楽に聴き入ることを勧める(参C-2、二〇七―二〇九頁)。『ル・サントール』については一致して讃辞を惜しまない評家たちも、『ラ・バカント』についてはこのようにして意見が分かれる。多様なイメージや場面のためにややもすると統一に欠ける憾みなしとしないこの散文詩は、それでもやはり、今では失われた神話的・宗教的・秘儀的世界の豊かな(あるいはその豊かさを垣間見させる)再構築となっていて、そこを貫く声は古い記憶の彼方の遠い岸辺から響いて来るように思われる。

翻訳はマルク・フユマロリ版の作品集(参A-6)に拠り、適宜トレビュシヤン編の著作集(参A-1)、ベルナル・ダルクール編の全集(参A-3)を参照した。

#### 【参考文献】

- (A) 翻訳または解題に利用・参照したゲランの作品集
1. Maurice de GUÉRIN, *Journal, lettres et poèmes, publiés avec l'assentiment de sa famille par G. S. Trebutien, et précédés d'une étude biographique et littéraire par M. Sainte-Beuve*, Paris, Didier, 1863 (4e édition).
  2. —, *Le Centaure, La Bacchante, Glaucus, Promenade à travers la lande, Sainte Thérèse, Journal, Lettres,*



- notice de Remy de Gourmont, Paris, Mercure de France, 1923.
- 3 ———, *Œuvres complètes*, texte établi et présenté par Bernard d'Harcourt, Paris, Les Belles Lettres, 1947, 2vol.
- 4 ———, *Le Centaure, La Bacchante*, précédés de «Le génie de Maurice de Guérin» par Charles Du Bos, préface de François Mauriac, Paris, Falaize, 1950.
- 5 ———, *Le Cahier vert*, texte établi d'après le manuscrit autographe, présenté et commenté par Claude Gély, Paris, Klincksieck, 1983.
- 6 ———, *Poésie*, édition présentée, établie et annotée par Marc Fumaroli, Paris, Gallimard, «Poésie», 1984.
- (B) 翻訳・訳註およびは解題に利用・参考にしたゲランのいろいろの研究書
- 1 Abel LEFRANC, *Maurice de Guérin d'après des documents inédits*, Paris, Honoré Champion, 1910.
  - 2 Ernest ZYROMSKI, *Maurice de Guérin*, Paris, A. Colin, 1921.
  - 3 E. DECAHORS, *Maurice de Guérin, essai de biographie psychologique*, Paris, Bloud et Gay, 1932.
  - 4 ———, «*Le Centaure*» et «*La Bacchante*», *les poèmes en prose de Maurice de Guérin et leurs sources antiques*, Toulouse, L'Archer, 1932.
  - 5 Bernard d'Harcourt, *Maurice de Guérin et le poème en prose*, Paris, Les Belles Lettres, 1932.
  - 6 Maya SCHÄRER-NUSSBERGER, *Maurice de Guérin, l'errance et la demeure*, Paris, Corti, 1965.
  - 7 Pierre MOREAU, *Maurice de Guérin ou les métamorphoses d'un Centaure*, Paris, Archives des Lettres modernes, n° 60, 1965.
  - 8 Charles DU BOS, *Du spirituel dans l'ordre littéraire*, Paris, Corti, 1967.
  - 9 Colloque international sur les GUÉRIN, *Lectures Guériniennes*, textes recueillis et présentés par Claude GÉLY,

Université de Montpellier, 1989.

10 Marie-Catherine HUET-BRICHARD, *Maurie de Guérin, imaginaire et écriture*, Paris, Lettres Modernes, 1993.

11 ——— (textes réunis et présentés par) , *Maurice de Guérin et le romantisme*, Toulouse, Presses Universitaires du Mirail, 2000.

(C) デラマンに関して利用した他の文献

1 Jean-Pierre RICHARD, *Études sur le romantisme*, Paris, Le Seuil, 1970.

2 Gaston BACHELARD, *L'air et les songes*, Paris, Corti, 1976.

3 Paul BÉNICHOU, *Le Temps des prophètes*, Paris, Gallimard, 1977.

4 Albert BÉGUIN, *L'Âme romantique et le rêve*, Paris, Corti, 1984.

5 Pierre ALBOUY, *Mythes et mythologies dans la littérature française*, Paris, A. Colin, 1985.

6 Pierre BRUNEL (dir.), *Dictionnaire des mythes littéraires*, Paris, Le Rocher, 1988.

7 Paul CLAUDEL, *Œuvres en prose*, Paris, Gallimard, «Pléiade», 1989.

8 BARBEY D'AUREVILLE, *Œuvres romanesques complètes*, publiées par Jacques Petit, Paris, Gallimard,

«Pléiade», 1964 (t. I), 1966 (t. II).

9 ———, *Amaïtée*, édition critique établie par J. Greene, A. Hirschi et J. Petit, Paris, Les Belles Lettres, Annales Littéraires de l'Université de Besançon, 1976.

10 ———, *Correspondance générale*, Paris, Les Belles Lettres, 1980-1989, 9vol.

(D) キリシマ・ローマ神話に関連して訳註などに利用したもの

1 OVIDE, *Les Métamorphoses*, traduction, introduction et notes par J. Chamonard, Paris, Garnier-Flammarion,

- 1966.
- 2 VIRGILE, *L'Énéide*, traduction, chronologie, introduction et notes par Maurice Rat, Paris, Garnier-Flammarion, 1965.
- 3 ———, *Les Bucoliques, Les Géorgiques*, traduction, chronologie, introduction et notes par Maurice Rat, Paris, Garnier-Flammarion, 1967.
- 4 Pierre GRIMAL, *Dictionnaire de la mythologie grecque et romaine*, Paris, Presses Universitaires de France, 1986.
- 5 Robert GRAVES, *Les Mythes grecs*, traduit de l'anglais par M. Hafez, Paris, Hachette/Pluriel, 1987, 2vol.
- 6 Joël SCHMIDT, *Dictionnaire de la mythologie grecque et romaine*, Paris, Larousse, «Références», 1991.
- 7 René MARTIN (dir.), *Dictionnaire culturel de la mythologie gréco-romaine*, Nathan, 1992.
- 8 Pierre LAROUSSE, *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*, Nîmes, Lacour, 1990-1992, 28vol, réimpression de l'édition de 1866-1876.
- 9 呉茂一『ギリシア神話』、新潮社、一九七〇年
- 10 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、岩波書店、一九九九年
- 11 F・ギラン、A・V・ピエール『ギリシア・ローマ神話』（I・II）、山口三夫訳、みすずぶっくす、一九六三—一九六四年
- 12 アポロドーロス『ギリシア神話』、高津春繁訳、岩波文庫、一九九八年
- 13 ヘシオドス『神統記』、廣川洋一訳、岩波文庫、二〇〇七年
- 14 パウサニアス『ギリシア案内記』（上・下）、馬場恵二訳、岩波文庫、二〇〇六年

- 15 オウイデイウス『変身物語』（上・下）、中村善也訳、岩波文庫、一九九七年
- 16 ウエルギリウス『アエネーイス』（上・下）、泉井久之助訳、岩波文庫、二〇〇四年
- 17 — 『牧歌・農耕詩』、小川正廣訳、京都大学学術出版会、二〇〇四年
- 18 エウリピデス『バツコスの信女』、松平千秋訳（『ギリシア悲劇Ⅳエウリピデス（下）』、ちくま文庫、二〇〇六年、所収）